

数学史研究

(通卷 123 号)

1989年10月～12月

目 次

論 説

- 新編諸算記について 戸 谷 清 一 ... 1
丸田正道について 道脇義正・丸田信夫 ... 7

資 料

- 三上義夫の欧文論文 平 山 諦 ... 16

追 悼 記 事

- 敝教傑先生に沈痛な哀悼を捧げる 『自然科学史研究』編集部 ... 19
大竹茂雄 訳

- 函 書 23

- 会 報 25

- 編 集 後 記 29

新編諸算記について

戸谷 清一

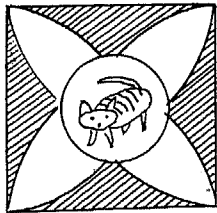
1. 寛永18年版と明暦3年版（田中文内梓行）の比較

以前、明暦版の『新編諸算記』の内容を調べていたとき、そこに書かれている内容の中に意味の不明な記載の部分があった。ところが最近になって寛永版の『新編諸算記』が発見され、この書によって明暦版のその不明な記載について理解することができた。そこで、以下にこの両書の内容のうち異なる部分を比較し、両書の成立について考えてみる。

寛 永 版

明 暦 版

第卅 萬ニはく積さん


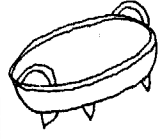


此天井四間四方 中に指渡……
金簿銀簿何程

金簿三寸四方 千百卅六枚欠五
……丸の坪ヲ加へ合十一坪三
分六リン……十二
坪二分「五リニ成 是にて右の坪われ八三寸五分」
ノはく八百三十四枚……

- 図が90°左廻り
- 千は子と誤刻
- 三分は一分（明暦版の方が正しい）
- 明暦版には「」内の文が欠除

第卅二 入子さん

	八 匁 六 分	九 匁 五 分 六 リ
		

……代銀四匁七分八りと成
▲同七ツ入子ヲ銀式拾壹匁ニ……

- 九匁五分六リは九匁□分と欠字
- 匁は五と誤刻
- 銀の文字欠除



第卅四 船賃仕分の事
本米
 八拾四石九斗五合六夕六才也 舟賃とも..... →六夕の文字欠除

第卅五 買物本銀ニ割懸事
 長崎にてかい物三人して相合にかい申候時
 一丁子 式百五拾斤 一ちんかう 七拾斤
 一いと 八千四百斤 一まき物 式百八十卷
 「右の四色をひとしろニ銀百六拾貫にかい」申時に
 是を三人あひ合..... →この「」内の文は、この
 あとに重複してでてる

 「右置用 丁子式百五拾斤右に置いて一人前が出る銀
 六拾四貫八百目をかくれハ一六二と成 是を惣高百
 六拾貫目にてわれハちやうじ」百一斤二五と成此二
 五といふ事忘れぬ時に一斤のおもめ「百六拾目と有
 是を二五ばかりにかくれハ」百壹斤四十目と成..... →この「」内の文の代わり
 述の「」内の文が入って明
 曆版は意味不明
 →成が明曆版は成成となる
 →この「」内の文欠除
 →二寸を「と一寸」と誤刻
 一丈五尺二寸と知.....

第卅六 斤目仕分さんの事
 糸百廿貫九百目有但百廿目壹斤と
同百六拾目壹斤と
 同式百五拾目壹斤と石次第々五拾斤ひきにして
何程と云
 →仕の文字欠除
 →この同式百五拾目以下の文
 字は小文字にすべきで、明曆
 版の方がわかりやすい
 →二を三と誤刻
 →五を上と誤刻
 →四の文字欠除
 此置用 先百六拾目一斤 百斤を二ツニ割ハ
三口合五百四十目ニ成.....
 唐目ヲ日本目ニ直スハ六四ヲ懸也 又.....

第卅七 浜いだしさん
 右の米高をわれば九里の米知
 又六里の米ハ九里の米ヲ拾五にてわり又三里の米ハ
 →明曆版には「十五をかくる」
 とあり、これが正しい。

第卅八 萬利足算用支
式石四斗四升ニ成 是ヲ左ニ..... →二成の文字欠除
 「此置用 右日数を合百一日ニ成 是に銀四分ヲか
 け又高の銀廿五貫目かくれハ 利銀壹貫四百拾四匁
 と志る、也」 →「」内の文欠除

第卅九 ほりふ志んさんの事
ふかさ六
 間半 長さ百廿間有 此坪数..... →間の文字欠除
 一里の廿六丁かくれい式百八十八丁と成..... →八の文字欠除
六拾間に成 是壹丁也 此一丁にて右の町を
 →一の文字欠除

この他、寛永版の末尾にある第四十五から第四十七までの条は明曆版にはない。
 以上の比較からみて、明曆版は書肆の私版とみてよいと考える。ただ、「第卅萬二はく積さん」、「第卅七浜いだしさん」において、寛永版における誤刻がみられるが、私版とみられる明曆版では正しく記されており、「第卅六斤目仕分さんの事」において明曆版の方が意味がつかみやすい活字になっている。こういう点を考えると、明曆版は書肆の私版であっても寛永18年版をもとにして作られたものでないといえる。ここでは明曆三年版をもとにして調べたもので、明曆元年版を見ていないので、この版の内容と上記の相違についてはわからないが、この二書を調べた限り現在の寛永18年版は原本でなく、これ以外に新編諸算記の原本があったように考えられる。

2, 新編諸算記と塵劫記
 『新編諸算記』の中には『塵劫記』と同じ問題(数値も同じ)がある。つぎにそれらの題が記載されている条目と掲げる。

- 第廿一 ひわたまわしさん 第廿二 竹まわしのさん
- 第廿三 ふき板積さん 第廿五 知行物成の事
- 第卅二 入子さん

第卅五 買物本銀ニ割懸事 (『塵劫記』ではながさき買物三人本銀に割付事)

第四十三 開平円法知ル

第四十四 開立法口伝知ル (末尾の「開立定積之法」)

この内容からみると、『新編諸算記』は『塵劫記』と無関係ではない。おそらくは『塵劫記』が刊行されて、従来の『算用記』『割算書』とは違った新しい内容で編集されたこの書が評判を呼ぶと、『新編諸算記』はこの新しい形態にならない、八算に代わって亀井割、また内容にも独自のものを加え、『塵劫記』にみならって刊行されたのであろう。そしてこの書が出版されると、『塵劫記』書肆の私版がでたように、この『新編諸算記』にも新しい算法の魅力もあって私版が刊行された。先に記した明暦3年版のものはその一つである。

なお、「開平円法知ル」の条は、つぎのように記されている。

一寸四方の坪七百拾一坪有 是を開平円法ニして
さしし渡し何程に成と云
此置用 坪数右ニ置 円法七九以割八九と成 是
を開平法にて直ス時三尺と知也
(a)先くらいを三尺と見れハあたりの寸ニて三尺を左
右に置 かくれ八九と成 是に七九をかくれハ右の
坪七百拾壹坪に成也 此坪を七九にてわれ八九と成
(b)右先くらいを見る時に式尺五寸と見る その式尺
五寸を左右に置 かくれハ六二五と成是を右の九ニ
て引ハ残ル二七五有 さて右式尺五寸とくらい見る
を一倍五尺にして是にて右一度わる時五と成 此五
を九九によび五々廿五下にて引 さて此五ヲ引はろ
ふ 此五を一倍十二して左五の所へ加ル時六と成
是を二ッニ割ハさしわたし三尺と志る、也

これは『塵劫記』にある

(a)ここは『塵劫記』にない。

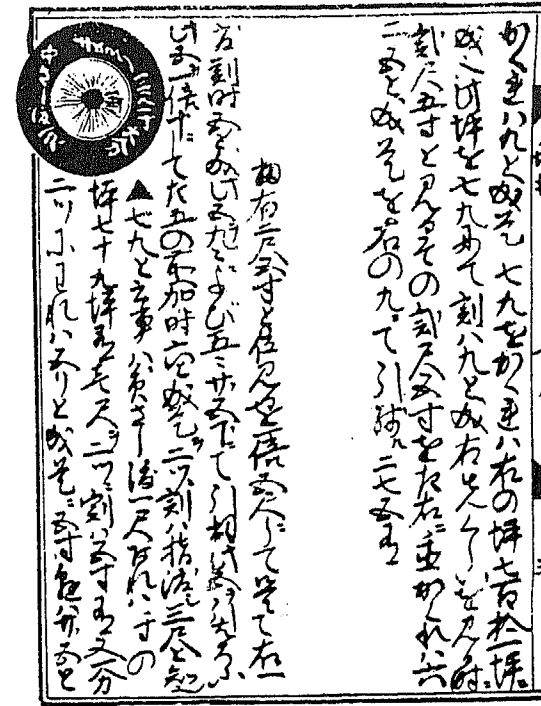
$3 \times 3 = 9$, $9 \times 79 = 711$,
 $711 \div 79 = 9$ の説明があるが、
記載の意図不明

(b)これも『塵劫記』にない。

$\sqrt{9}$ の計算法が記されているが、
初商に2.5を設定し、つぎに次
商0.5たて、根を3としている
が、この計算はふつうではなく、
この記載の内容は突飛である。

なお、明暦版では次に示したように続ける文が途中でとぎれて空白になっている。

どういう理由でこのようなことになったのか、明らかでない。



3. 新編諸算記と諸勘分物

『新編諸算記』と『諸勘分物』に記されている各種の定数を比較してみる。

	諸勘分物	新編諸算記
楯の法	$V \times 1.6$ (京ますと記す)	$V \div 0.64827$ (京ます, 今ますと記す)
円法 $\frac{\pi}{4}$	0.8	0.79
$\sqrt{2}$	1.4	1.4142
円周より内接する正方形の一辺を求める	$l \div 4.48$	$l \div 4.4689$
円と同面積の正方形の一辺	$d \times \sqrt{\frac{4}{\pi}} = d \times 0.894444$	$d \div \sqrt{\frac{4}{\pi}} = d \div 1.125$
三角形の面積	$h = a \times 0.9$ または $a = 1.1h$ として求める	$s = a^2 \times 0.433$
六角形の面積	$a \times 1.5$ と $a \times 1.8$ の積	$s = a^2 \times 2.598$

ここに記した『新編諸算記』の数値は『塵劫記』にある数値と同じである。この比較からみると、『諸勘分物』の筆者百川治兵衛と『新編諸算記』の著者百川忠兵衛を同一人と

みてよいかどうか、この点非常にむづかしい。百川治兵衛が『塵劫記』を見て、自分のもっていた数学上の知識を『塵劫記』流に蔵替えし、このため故意に名を変えて『新編諸算記』を編集したことは考えにくい。

忠兵衛は治兵衛の縁者で新しい数学（『塵劫記』など）を研究した人か、あるいは同姓の異人か、それとも同一人か、これを研究するための一つの資料として書いてみた。

(平成元年7月22日受理)

論 説

丸田正通について

道脇義正・丸田信夫*

1. 丸田正通の概要

『越後国諸堂社諸流奉額集』³⁾によった、『新潟の算額』p.17に「懸北越新発田諏方社」³⁾の終わりに

寛政12年庚申九月

前術 正通, 後術 富且

〔会田安明の附言〕評曰、前術正通ト言イ丸田源五右ヱ門正通ナリ。後術富且ト言イ和田栄吉富且ナリ。其翌年辛酉右ノ両士予ガ門人トナルナリ]

とある。

丸田正通について、そして関流・最上流論争について新しい資料が得られたので報告する。

新発田藩士丸田源五衛門正通は新発田築留（現在新発田市城北1番地）に丸田道高の長男として安永8年（1779）に生まれた。

幼名を三五郎、初名を林太郎源内といい、字を子周、景山と称した。その後、隠居して達馬と称した。

寛政5年（1793）14才で算術の勉強を志し、関流坂井広明、皆川正衡に師事し、その成果は大いに上った。同10年19才のとき、江戸に出たが足痛のため帰郷した。

恐らく、この頃今井惣之助の娘を迎えて妻となしたのであろう。同11年11月8日に長女を出生している。同12年21才の折父道高より家督を相続し、3人扶持6石、裏御用部屋祐筆となった。

享和3年（1803）5月20日に長男金五郎正盈が出生。女7名男4名計11名の子福者であったが、幼折した人もある。

その後3回江戸詰め、下勘定方、その他水利工事や測量担当、藩より報償加増。天保4年（1833）4月27日没、55才。菩提寺は則清養福寺に埋葬。

冒頭の引用した会田安明の言によれば、彼は享和元年（1801）会田に入門したはずである。江戸詰の折のことであろうか。市瀬惟長、市野茂喬、渡辺一と共に会田の四天王と呼ばれ、新発田地方に最上流の門弟130名を擁したといわれる。

ここで、丸田正通の家系を述べる。正通は元祖の則清より5代目である。そして子孫が

現存している。

丸田孫内則清	—— 孫内清興	—— 孫内興高
(?~享保9. 1. 12)	(養子) 幼名五市	幼名金五郎
	隱居名 う哲	初名仁八
	(?—明和6. 11. 15)	(享保4. 7. 16 ~天明2. 1. 14)

—— 源五右衛門道高	—— 源五右衛門正通
(養子) 幼名三五郎	幼名金五郎
初名林太郎源内	初名戸又
隱居名達馬	後改名金十郎
(?~文化1. 12. 31)	(寛政8. 9. 17~天保4. 6. 27)

—— 源内正盈	—— 權之助正固
幼名金五郎	(ツネ)
後改名外記右衛門	(?~明治28. 9. 24)
(享和3. 1. 24~?)	

—— 正家	—— 正安
(明治6. 6. 26~昭和2. 3. 30)	(明治35. 1. 4~昭和36. 7. 16)

—— 正樹(当主)*
(昭和7. 8. 22~)

「算法撰術要法」²⁾ という巻物がある。序のあとに

- 加減業之事
 - 減和業之事
 - 加加業之事
 - 減減業之事
- } (本文略)

と述べてそのあとに

右所傳之法予独学之砌考求之而以解點竄天生法等之妙術也今吾子頗至天元演段天生法等之術故傳焉因吾子此法解難題則予本望也云爾

景山 丸田正通子周識

又實廉相乘之趣意

が続き

評曰右加減減加之式加法實廉相乘而解之片

ハ直得長平也依此理モ明カ也

右丸田先生之高考而予受之今又傳吾子事如件

山崎三之丞寛林 —— 早川鐵五郎信道
弘化五戊甲歳 ㊦ ㊦
今井盛之助殿

丸田は独学としたとあるが何時頃のことであろうか。14才以前のことではないだろう。19才で上京する迄は師についている。足痛のため帰郷したあとのことか。

2. 業績について

丸田正通が書いたか、編集した本をあげ、その内容を概説する。

(i) 『入徳算法』最上流算額譜、門人題名、入徳算法よりなる丸田の自筆本。算学譜に文化元甲子年(1802)景山 丸田正通子周識と書かれている。

『入徳算法』には、仮名八算、仮名見一、見一、乗除算、寄算よりなる。

(ii) 『算法教授』6冊 年紀なし。最上流 景山 丸田源五右衛門正通編とある。

卷之一 総目録、相場割、利足割、坪割

卷之二 等分、衰分、差分

卷之三 盈朒、高切、均輸、方程

卷之四 方程、圭梁、雑類

卷之五 方田、少広、容術、開平方、開立方、累乗方

卷之六 鈎股弦、径矢弦、弧矢弦

(iii) 『新編 算法混約術 乾』年紀なし、丸田の自筆本。

混約術の通術と簡術

算法混約術 1冊 前編として既刊・坤は未編集だったのではなかろうか。

(iv) 『實廉相乗之趣意』年紀なし。丸田の自筆本。長方形の面積と2辺の和または差を与えて、その辺の長さを求める問題で2問あり。その解を記している。

(v) 『献額算法』2冊 年紀なし。丸田自筆本。

乾の巻 懸北越新発田諏方社 前出

懸北越菅谷不動堂 享和元^{辛酉}年4月吉日 新発田処士坂井広明考術 門人願主加治郷、中野恭雄 施主加治郷連中

懸北越新潟白山社 寛政十三辛酉年正月吉日

前二術 六之町大川前 谷 捨 藏

後 〃 下一之町大川前 山本金五郎

懸北越新潟白山社 享和二龍集云黙闇茂秋七月 僧法爾一雪齊校 門人亀田町 笹木恒吉敦賢

懸北越新潟白山社 享和二壬戌冬日 当所住 何某

懸北越新発田諏方社 文化元甲乙年七月 前術 川嶋義知 中術 中野保高 後術 橋本勝房

懸北越新発田下町神明社 文化六巳巳年四月

最上流 塩原道明門人 高木専榮 と四社18問とその解答16問.

坤の巻

献額算法

懸東都愛宕山 享和二壬戌年三月

最上流自在先生門人 第一術 東都通二丁目住 市瀬長兵衛惟長

第二術 津軽家 中石川元右衛門惟一 第三術 新発田家中 和田栄吉富且

第四術 同 丸田源五右衛門正通

第五術 熊本家中 嶋田源吾泰孝

第六術 武州足立郡梅田邑住 大原彦兵衛理正

懸北越新潟白山社 享和二癸年四月

新発田家中 山本金平方剛

懸乙大日堂 文化四丁卯年七月

新発田家中 榎本洪右衛門信房

懸北越新発田諏方社 文化五戊辰年閏六月

前術 藩中 高橋卷藏徳通

後術 泉町 塩原善七道明

と四社11問とその解答

附録 蔵書目録

(vi) 『算法額術起源 全』1冊 丸田の自筆 寛政十二年庚申九月

(v) の乾の巻の冒頭の問題の解と別解

(vii) 『許状目録并門人名前写』1冊 丸田の自筆. 表紙に文化九壬申年八月とある.

門人名77名がかかっている.

(viii) 『算学譜及門人題名』(下書)1冊 文化元甲子年 丸田自筆. 門人名文化6年入門までを記す. 文政元年に比べて52名少ない77名.

(ix) 『算法天正法 乾之巻』6冊(1, 2巻欠)

巻7(28丁)巻八(31丁)は丸田源五衛門正通編としてある.

(x) 『最上流 算法天正法指南』5冊 文化八年

巻之二, 巻之四は市野金助茂喬, 丸田源五右衛門正通の校訂とあり, 丸田31才のときである.

(xi) 『算題20条』1冊 写本(丸田自筆か)

初めに会田安明撰集とある, 問題二十題をかかげ, 四題のみ解答している.

巻末に^{新編}変旨算法 景山 丸田源五右衛門正通編とあり, 問題を一題かかげ解答している.

(xii) 浅草浅草寺境内にある会田安明「算子塚」の碑を刻む

(xiii) 『円理弧背真之密法 全』文化年七月(1805)に著し, その中で円周率を27桁まで求めている.

3. 『関流七條之標額及争論』(下書)¹⁾

丸田の著書ではないが, その蔵書に上掲のものがある. 関流七條之標額とは南筑米藩算学関流四傳藤田權平貞資門人自問自答七條

東都 丸山因平良法

(本問 略)

上州群馬郡 汰橋石田恒玄圭

(本問 略)

上州沼田藩 掘田文兵衛光長

(本問 略)

忍藩 中泉嘉兵衛宗照

(本問 略)

筑州米府 城崎庄右衛門方正

(本問 略)

同 新藤用助均和

(本問 略)

東都芝 野崎五郎作国郷

(本問 略)

文化二年乙丑八月

次に, 「争論」の部分少し長いが書き上げる.

此条短至ヲ得ル術ヲ撰マハ大田至ヲ類スルニ益アリ其術曰置三箇開平方倍之以減五箇余衆大至得短至合問 自問自答ナルモノハ勤テ簡術トナル筭類ヲ撰ムモノ可ナリ又是至ヲ問ハハ小田至ヲ類スルモノ可ナリ其術曰置三箇開平方倍之以減九箇余衆小至得長至合問

糺町平川天神ニ裁ル田墾減瓠環ノ評

評曰此類小球十箇ニ限ル物ナレハ云ナルモノ面白シ然ルニ減瓠環ヲ作ルモノニ二品アリ側四ヲ規リシテ作ルモノ全田ヲ規リシテ作ルモノ是ナリ故ニ是ヲ分テ云ハサレハ轉類ナリ
跋曰他門ノ類術ヲ論スルハ予ニ於テ不好ト云凡池谷鏡之助強テ其評論ヲ請フ止ムハ予得ベカラズ故ニ此小書ヲ作テ評スルハ前ノ如シ

藤田定資ニ送ル所ノ七条之評論

關流ヨリ芝愛宕山ニ裁ル所ノ類術ノ評

其一

評曰此條假ニ數ヲ設ケテ是ヲ試ムルハ短至一寸長至四寸八分短至二寸長至一尺短至三寸長至一尺五寸二分而シテ其答七箇トナル此ノ如ク虚數ヲ用ヘテ答ニ合スル正術アリヤ如何

其二

評曰此條ノ答術迂遠ナリ術曰以二十三箇除三箇開平方三之如一箇以除大至得元至合問ト術スルモノ可ナリ

其三

評曰此条譬ハ錐至一寸ノ錐高一寸四一四二有奇ト云凡ハ小球十二箇トナル是ハ方面ト方斜トノ數ナリ方面ト方斜トヲ類シテ問物ト云フ正類アリヤ如何又曰術中ニ毛位以下棄之ノ加文見ヘタリ此條ハ棄ズシテ類ニ

右ノ評論ハ予カ門人深澤新藏成義方ヨリ十月十四日池谷鏡之助ヲ以テ藤田權平定資ニ送ル所ノ論書ナリ乃シ深沢ト池谷トハ竹馬ノ友ニシテ劍術ノ相弟子ナリ故ニ親友ナリ向キニ街路ニテ逢シ凡池谷氏ノ曰予カ先生ノ方ヨリ出ス所ノ掾類ヲ見タルヤ深沢ノ曰既ニ聞セリ池谷高言シテ曰面白キ類術ニアラスヤ深沢ノ曰シカラズ平川ノ類ハ轉類ナリ愛宕山ノ類術モ又不可ナリ池谷然トシテ憤リ以テ藤田定資ニ談ル定資大ニ憤リ変シテ轉類アルハ予シ彼減瓠環ノ類小球箇數ヲ云ガル故ニ轉類ト云ナラント想ヘリ故ニ池谷ニ命シテ深澤ヲ責ム深沢辞スレ凡免サズ強テ紕サント攻ム故ニ右ノ如ク筆論ニ及ベリ同凡一日劍術ノ稽古場ニ於テ深沢ト池谷ト出會セリ深沢問テ曰先比送ル所ノ論書

合フ然ラバ棄ルト云モノハ迂遠ナルベシ

其五

此条類中ニ乙球ト大球ト切ルハ予シ然ルハ千万容レテモ究リナシ落文ナルヤ又曰中段不拘厚薄也ト云此類ハ假令ハ甲球至一寸ナレハ中段ノ厚ハ二厘八六三三八有奇ト限ル數アリ然ルハ中段ニモ抱ハルベシ若シ局類ノ類ニシテ厚クモ薄クモ勝手次第ニナルラバ不拘トモ云ベシ此文ハ云ガルモノ害ナカルベシ

其六

此條ノ術ハ少ク迂遠ナリ若又乙田ト戊田トヲ類セバ平方一次ニシテ簡易トナル其術曰以乙至除戊至開平方名天三之以減四箇余以三箇天差除之自之衆乙至得丁至合問 自問自答ナルモノハ勤テ簡術トナル筭類ヲ撰ムモノ可ナリ尚勤テ類類ヲ撰マハ大ヒニ簡術トナルモノアリ

ナレバ其断リナキハ轉題トナリ殊ニ
定資ハ側田ヲ規リシテ作ル瓠環ノ真術ハ得
スト云ヘリ予ハ既ニ其真術ヲ得タリ故ニ轉
題ナルヲ論ズルモノナリ若定資其門人ニ
談ル所ノ意ヲ以テ論書ノ答トナシテ予ニ送
ラバ重テ又大笑ヒニテアリシモノナリ

乙丑十一月

會田安明子貫識

以上のように、一般に言われている神谷定令が藤田側の窓口であるということと異なる。関係者の当人が書いているので真実であろう。それにしてもこの論争の、両人の考え方が如実に現れて面白い。

本稿を草するに当てて慶応大学図書館、日本学士院にお世話になりました。感謝の意を表します。

参考文献

- 1) 会田安明 『関流七條之標額及争論』 1805
- 2) 丸田正通 『算法撰術要法』 1848
- 3) 道脇義正 『新潟の算額』 1967 (北陸印刷刊)

注 *現当主の叔父に当たる。

(平成元年4月6日受理)

ノ答ハ如何ン池谷氏赤面シテ答曰藤田先生
ノ曰アノ事ハアレギリニシテ置グレヨトノ
云ナリ予ニ於テ如何トモスルヲ能ハズ深沢
曰向ニ足下轉題ニテハ其理ニ色トナル是非
一色ニ斐セント強テ予ヲ責ム故ニ止ムヲ
得ズシテ評論ノ書ヲ作意ス然ルニ今答ル
能ハガレハ屈伏シタルモノナリ彌轉題虚題
ノ款會得スルヤ如何ン池谷氏尚赤面シテ震
ヒ恐ル深沢又曰答書ナキハ勝敗ハ既ニ明
白ナリ然レト別ニ藤田氏ノ足下ニ談ズル所
ハ十カリシヤ池谷小言シテ曰先生少シク談
ル所アリ瓠環ト云ハ全田ヲ規シテ作ルモノ
ノナリ會田氏ノ著ス所ノ算書ニモ瓠ト云
モノハ皆全田ノ規リナリ側田ヲ規シテ作ル
瓠環ハ其真術アルカハ知ラズ甚混雜シテ
得ベカラズ會田氏ハ其真術ヲ得タルモノカ
予ニ於テ未タ得ス當流ニテハ全田ヲ規シテ
作ルモノヲ用エルト云又云假ニ數ヲ設テ試

ムルト云ナキナリト云深沢尚問詰シカ
其他談ズル所ナシト云然ルハ定資第二第三
第五第六第七ノ五條ハ既ニ其誤マルヲ知
リテ其門人ニモ談ルナシ右定資カ池谷ニ
語ル所ノ二條モ亦甚誤レリ抑算術ハ假ニ數
ヲ設テ試ムベキナリ常例ナリ假ニ虚數ヲ用
テ其術ヲ試ムルハ答ニ合サルモノハ正題ナ
リ彼ノ題ノ如ク虚數ヲ用テ答ニ合モノハ
虚題ナル故ナリ定資モ未タ正題虚題ノ意味
ヲ知ラザルナリ明白ナリ又曰定資瓠環ノナ
全田闕ニ云マキラカセリ予ガ著ス所ノ諸算
書ニ瓠環ト云モノアルナシ全田闕ノナ
瓠ト云ハ古ヨリ唱ヘ來ル所ノ名ニシテ其形
平面ニシテ明ラカナルハ側田闕トマキル
ナリモアルベカラズ側田闕ノ算額ナラハ即チ
側田闕ト云ベシ何ヲ瓠ト云モノアラナヤ瓠
環ナルモノハ其形全田ヲ規シテ作ルモノカ
側田ヲ規シテ作ルモノカ明カナラザルモノ

三上義夫の欧文論文

平山 諦

三上義夫 (1875~1950) が欧文で発表した論文の中には掲載誌を見られないで、抜刷などによったものがあるから、年代順に並べることはできなかった。(1頁から始まるものは抜刷) 論文末の執筆年や頁数なども掲げることにした。

略字表

- A.A.P.P., Annales da Academia Polytechnica do Porto.
 A.M.M. The American Mathematical Monthly.
 A.M.N. Archiv for Mathematik og Naturvidenskab.
 A.M.P. Archiv der Mathematik und Physik.
 B.M. Bibliotheca Mathematica.
 Isis. Isis.
 J.D.M.V. Jahresbericht der Deutschen Mathematiker-Vereinigung.
 N.A.W. Nieuw Archief voor Wiskunde.
 P.P.M.S.J. Proceeding of the Physico-Mathematical Society of Japan.
 S.M. Scripta Mathematica.
 T.M.J. Tohoku Mathematical Journal.
 Monist. Monist
1. The rectification of the ellipse by Japanese mathematicians. B.M. 3,12.(1912), pp.225-237.
 2. On an astronomical treatise composed by a Portuguese in Japan. N.A.W. Tweede Reeks, Tiend Deel. pp.1-10.
 3. On a Japanese manuscript of the 17th century concerning the European astronomy. N.A.W. Tweede Reeks, Tiend Deel. pp.1-4.
 4. A Japanese Buddhist's View of the European astronomy. N.A.W. Tweede Reeks, Tiend Deel. pp.1-11.
 5. A remark on the Chinese mathematics in Cantor's Geschichte der Mathematik.(Bd.I. Dritte Auflage. 1907)(Ohara, 1908). A.M.P. 3,15. pp.68-70.
 6. Seki and Shibukawa. J.D.M.V. 17,5. (1908). pp.187-196.
 7. Further remarks on the Chinese mathematics in Cantor's Geschichte der Mathematik.

- (Bd.I.Dritte Auflage)(Ohara,1911). A.M.P. 3,18. (1911). pp.209-219.
8. Notes on the native Japanese mathematics.(Ohara,1911). A.M.P. 3,20. pp.1-10.
 9. The teaching of mathematics in Japan. A.M.M. 18,6-7. (1911). pp.123-134.
 10. The circle-squaring of the Chinese.B.M. 3,10. (1910). pp.193-200.
 11. The influence of abaci on the Chinese and Japanese mathematics. J.D.M.V. 20,(1911). pp.380-393.
 12. Arithmetic with fractions in old China. A.M.N. 32,3,(1911). pp.1-10.
 13. Zur Frage abendländischer Einflüsse auf die Japanische Mathematik am Ende des seebzehnten Jahrhunderts. B.M. 3,7,(1907). pp.364-366.
 14. Hatono Soha and the mathematics of Seki.(Ohara,1909). N.A.W. Tweede Reeks, Negende Deel.pp.1-4.
 15. On reading P.Harzer's paper on the mathematics in Japan. J.D.M.V. 15. pp.256-257.
 16. A question on Seki's invention of the circle-principle. P.P.M.S.J. 2,4.pp.442-446.
 17. On the Dutch art of surveying as studied in Japan. N.A.W. Tweede Reeks, Negende Deel.pp.1-4.
 18. Some additions to my paper "on the Dutch art of surveying as studied in Japan." N.A.W. Tweede Reeks, Negende Deel. pp.1-3.
 19. Remarks on T. Hayashi's "brief history of Japanese mathematics". N.A.W. Tweede Reeks, Negende Deel.pp.1-14.
 20. Notes on the Portuguese astronomer in Japan. A.A.P.P. 8,(1913). pp.1-6.
 21. Notes on the native Japanese mathematics. A.M.P. 3,22,(1914). pp.183-199.
 22. On Aida Anmei's solution of an equation. A.A.P.P. 8,(1913). pp.1-7.
 23. On Ajima Chokuyen's solution of the indeterminate equation

$$x_1^2 + x_2^2 + x_3^2 + \dots + x_n^2 = y^2$$
 A.M.N. 33,Z.(1913). pp.3-8.
 24. T. Endo's history of Japanese mathematics. Isis. 4,(1921). pp.70-81.
 25. On the establishment of the yenri theory in the old Japanese mathematics. P.P.M.S.J. 3,12,(1930). pp.43-64.
 26. On the kwanrui-jutsu or recurring method as given by Kenmochi Shoko. T.M.J.I.(1911). pp.98-105.
 27. The parabola and Hyperbola in Japanese mathematics. T.M.J. 2,(1913). pp.29-37.
 28. On Miyai Antai's solution of an equation by successive approximations. T.M.J. 5.

(1914). pp.176-179.

29. On a problme of Japanese mathematics. T.M.J. 7.(1915). pp.71-73.

30. Mamoru Mimori, -A master teacher of mathematics in Japan. S.M. 1.(1932). pp.254-255.

単行本

Mathematical papers from the Far East. Teubner, Leipzig, 1910.

The development of mathematics in China and Japan. Teubner, Leipzig, 1913. pp.347.

A history of Japanese mathematics. The Open Court Publishing Company, Chicago, 1914, pp.288. (D.E.Smith と共著)

以上, 論文, 単行本を入れて頁数は約972頁に達する. 因に林鶴一の欧文発表論文の頁数はこの半分より少し多い位, 約24編. 柳原吉次は5編, 約50頁.

三上が1910年に出版したはじめての単行本がD.E.Smithの目にとまって, 9. に記るした「日本の数学教育」の執筆が依頼された.

〔追記〕

以上30編は実物を調査して原稿を送った所, 下平和夫氏から三上の論文目録(2)が科学史研究22号(1952)にあることを教えられた. これと比較して次のものが落ちていた.

1. A Chinese theorem on geometry. A. M. P. (1905)
2. A remark on T. Hayashi's article on the Fukudai. P. P. M. S. J. (1910)
3. On the discovery of the circle-principle. P. P. M. S. J. (1910)
4. A remark on Russell's theorem. Monist, 20,1, (1910)
5. Remarks on De Carus's view concerning geometry. Monist. (1911)
6. On a Japanese astronomical treatise based on Dutch works N. A. W. 2,9, (1911)
7. The circle-measurement of the Takuma school P. P. M. S. J. (1913)
8. On the formula for an area of a circle in the Kwatsuyo-Sampo and allied subjects. P. P. M. S. J. (1913)
9. On the Japanese theory of determinants. Isis. (1914)
10. On Shizuki's translation of Keill's astronomical treatise. N. A. W. (1915)
11. Mathematics in China and Japan. Scientific Japan, an annexed volume to the Proceedings of the third Pan-Pacific Science Congress, Tokyo. (1926)
12. The Ch'ou Jen Chuan of Yüan. Isis, 11. (1928)

なお前記30は次のものに再掲された.

Archives Internationales d'Histoire des Scieces. 11. (1949)

追悼記事

嚴敦傑先生に沈痛な哀悼を捧げる¹⁾

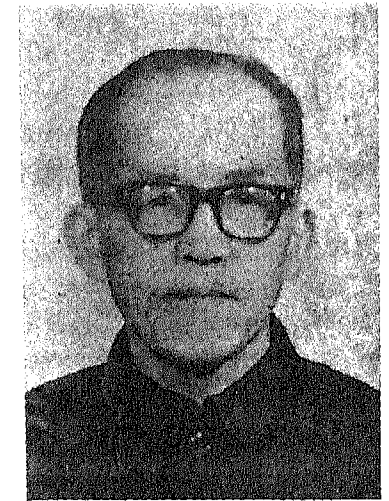
『自然科学史研究』編集部

本誌の初代編集主任で著名な科学史家であり, 中国科学技術史学会第1回理事会副理事長, 中国科学院自然科学史研究所副所長を歴任された研究員の嚴敦傑先生は, 病氣治療²⁾の効もなく不幸にして1988年12月23日の18時15分に, 北京で逝去されました. 享年は71歳でありました.

嚴敦傑先生は, 字を季勇といい浙江省嘉興市の人で, 1917年11月1日に生まれました. 1940年代の初めに中央大学数学系に学ばれ, 若い頃は中国科学社および中華学芸社の社員でした. 1957年には中国民主同盟³⁾に加入されました.

嚴敦傑先生は生涯を, 祖国の科学遺産の整理研究の仕事に尽力なされた方で, 中国数学史研究の基礎をつくった人の1人であります. 早くも中学時代に, 中国科学史の研究に志を立てられ, 1936年に学術論文を正式に発表いたしました. 1956年以前には, 校正係, 事務員, 会計係, 財務課長等の仕事に長い期間従事していたのでありますが, 先生は志を変えないで, その苦しさ極まる条件下においても業務の余暇に科学史の研究を堅持されて, 人々の注目を集めた成果を収めたのでした. 1956年に, 中国科学院自然科学史研究室(すなわち現在の自然科学史研究所の前身)に転勤されてからは, 先生の年来の願望でありました科学史とくに数学史の研究に専心して尽力することが, 遂に実現したのであります.

嚴敦傑先生は一貫して, 中国共産党と社会主義祖国を熱愛いたし, 中国科学技術史の事業に熱心でありました. 中国科学院自然科学史研究所の学術を作りあげる事と文献資料を集める仕事に傑出した貢献をされ, また中国科学技術史という学問分野の創設およびその発展にたくさんの有益な仕事をなさいました. 先生は, 中国科学院自然科学史研究室の学術副秘書, 『科学史集刊』の常務編集副主任, 自然科学史研究所副所長, 同所学術委員会主任, 『自然科学史研究』の編集主任等の職を歴任されました. この外にも, 中国科学技



嚴敦傑先生遺影

術史学会副理事長，中国数学会理事，中国数学会および中国科学技術史学会の数学史分会理事長，中国珠算協会常務理事，中国科学技術大学研究生院兼務教授，博士課程の指導教官，國務院古籍整理出版企画小委員会の委員等の任にあたられました。

嚴敦傑先生の学問の基礎は深厚で，その研究態度は厳格でして，先生が主張されることには必ず根拠があり，独自の特色を具えておられました。先生は半世紀の間，科学史の学術論著百余篇（部）を発表なされました。その内容は，数学史，天文曆法史，航海技術史，中国と外国との科学技術交流史，科学史学史および科学史文献学等の分野に及んでおります。また，郭沫若主編の『中国史稿』と范文瀾主編の『中国通史』の科学技術史部分を執筆され，『中国大百科全書・数学』の数学史部門と『中国古代科技史論文索引』の編集主任をされました。なおまた，『中国科技通史』上・下，『中国古代航海史』，『中外日蝕記録』および『祖冲之科学文集』等の著書があります。

嚴敦傑先生は，その豊富でしかも貴重な学問研究の成果が科学史界で敬服され尊重されていただけでなく，学問研究の有り方と人間としての立派なお手本を私たちに与えてくれました。先生は己れを律するには厳しかったのでありますが，喜んで他人を助けられ後進を育てることに全力を傾注されました。常に無私公平に，所内外の人たちに研究援助をなされたが，とりわけ青年研究者に研究資料を提供したり国内外の科学史研究の動向を紹介したりして，具体的な指導を行ってくれたのでした。先生の言語に絶する苦難な研究開拓の精神と，国家のために尽くす奮闘精神は，人々に深い感動を与えずにはおきません。1982年12月，先生は外国への公務出張から帰国早々に，上海および広州に急いで赴かれ学術会議に出席されましたが，過労のために突然脳血栓で倒れられ不幸にも半身不随になられたのでした。以後数年の間，先生は驚くべき気力をもって疾病と闘われたのであります。病気によって右手の機能を失われてからは，病体に鞭打たれて左手を使って執筆を中断することなく続けられて，学術論文二十数篇（部）を発表されましたし，また多量の原稿を整理されました。このような先生は，ご臨終寸前まで未完の仕事について，いつものように考えておられたことであらう。

嚴敦傑先生の学問上の業績は，国際科学史学界において称賛と推賞を受けるに到りました。先生はかつて，中国科学史界を代表してユネスコの活動に参加され，人類文化史の編著の仕事に関与されました。またかつて，中国古代伝統技術展覧団の学術顧問に任ぜられてカナダに赴き，任務を立派に完成され祖国のために榮譽を得られました。

嚴敦傑先生の葬儀には，^①数多くの科学研究機関，著名な学者および生前交友のあった方々からの弔電，弔詞が届けられたり，花輪や挽聯が贈られて沈痛な哀悼が捧げられました。中国科学院数学研究所の孫克定先生が贈られた挽聯には

苦学成高名， 業績与先賢並列，

久病勤著書， 遺志付后学繼承。

と書かれてありましたが，これは先生の一生をたいへん良く描写しており，私たちの心情を表現してくれているものであります。

嚴敦傑先生は，科学史事業の発展に充分な関心をもたれ，科学研究成果を発表する場をつくることを非常に重要視されました。すなわち『自然科学史研究』の創刊と内容の質的量的な向上に対し並々でない労力を費され，常に編集の仕事について熱情的な指導を与えてくれたのであります。このような先生のご逝去は，本誌にとって良き指導者を失ったのみでなく，中国科学史界にとっても重大な損失であります。私たちは，この悲しみを力量に転化させ，一身同体となって先生の優れた人柄に学び，先生のご遺志を繼承して本誌を更により良いものにし，中国の科学史研究の推進発展に努力いたそうと考えるものであります。

注

① 嚴敦傑先生のご逝去に際し，中国科学院自然科学史研究所は，盧錫為を主任とする委員70人で葬儀委員会を組織しました。そして，錢臨照，吳文俊，王元，陳遵媯，孫克定，李鑒澄，蔡美彪，李新等と自然科学史研究所の王奎克，席沢宗，杜石然，陳美東等二百有余の著名な学者および関連研究所の責任者，生前交友のあった方々が，1989年1月4日に北京の八宝山革命公墓礼堂で挙行された嚴敦傑先生遺体告別儀式に深い悲しみのうちに参列されました。

訳注

1) 中国科学技術史学会・中国科学院自然科学史研究所編集『自然科学史研究』vol. 8, No. 2 (1989年，北京・科学出版社) P. P. 97-98 所載の「沉痛悼念严敦杰先生(本刊編輯部)」の翻訳である。翻訳にあたっては，簡体字はすべて旧字体もしくは日本の当用漢字体に直した。

2) 研究員は大学教授に相当する職名である。なお自然科学史研究所については，本誌No. 119, 1988年所載の

拙訳「中国科学院自然科学史研究所建所30周年(簡信)」

を参照してほしい。

3) 中国民主同盟は，1941年に発足した中国民主政団同盟が，1944年に改称したもので，民主政治の実行を主張し，新中国成立(1949年)以後は愛国民主党派として活動している。

4) 挽聯は、死者を哀悼する対句で、造花の花輪などにつけて贈る。

付記) 私は、1982年と1984年の訪中の折に、北京で嚴敦傑先生とお会いした。最初は病気になる前でお元気であったが、2度目の時は病後で言語障害もあったご様子でご挨拶をただけであった。本文によると、ご不自由なお体で研究と執筆を最後まで続けられていたとのことで、嚴先生の超人的な研究にただ敬服するのみである。

なお、本文掲載の『自然科学史研究』vol. 8, No. 2に、嚴敦傑先生の遺著として梅文鼎的数学和天文学工作

という論文が載っている。これは、1988年11月に安徽省宣州市で開催された梅文鼎記念国際会議で発表された内容とのことであるから、あるいは絶筆なのかも知れない。

おわりに改めて、嚴敦傑先生のご冥福を心からお祈りして止まない。

(大竹茂雄 訳)

図 書

福島県和算研究保存会『福島の算額』A 4 と B 5 の中間、564ページ、蒼樹出版、平成元年 8 月 30 日、15,000円

福島県和算研究保存会では、平山諦の努力により刊行された『福島の算額』（全五巻）について、これを孔版でなく活版印刷として、全巻をまとめて一書にしようと考えた。今回この大事業が完成した事はまことに喜ばしい。

本書によって、現在までの調査研究による福島の算額（現存も亡失も含めて）がすべてまとめられた事になる。しかも、どの問題も簡単ではあるが、現代文に書きなおされている。

さらに、最後に、上記算額の中から16問を選び、現代文になおすとともに、現代数学で解説している。このような豪華本にまとめるには、関係者の方々の金銭的にも労力的にも多大な奉仕活動があった事と推察する。

本文の第一章は「福島の算額」と題し、福島県に関係したすべての算額を紹介している。第二章は「算額について」と題し、次の項目に分かれている。

- 一. 福島の算額の特徴
- 二. 算額を尋ねて
- 三. 算額収集記
- 四. 復元算額一覧表
- 五. 算額探索・発見協力者の芳名
- 六. 和算用語

各項目は、その見出しを見ればすぐに何が書かれているか理解できるであろう。最後の「和算用語」は、一種の和算用語事典となっているので一読をおすすめする。

第三章は「算額の現代解（十六問）」となっている。

グラビアは1枚だけあり、福島県伊達郡梁川町八幡神社の算額（文化14年、中木温卿の奉納）の写真がきれいにカラーで印刷されている。

500部印刷との事であるが、定価の15,000円（消費税込）は、この種の上質紙を使った豪華本の出版物としては安い方ではないかと思える。（小生の考えでは2～3万円が普通ではないか）

送料は出版者の負担。送金先は郵便振替、郡山1-1352蒼樹出版。

(下平和夫)

受贈図書

米光 丁『九州の算額』B5, 51ページ. 平成元年6月2日発行 自家版

米光氏は本学会会員で、長崎県大村市に住み九州の算額を調査している。米光氏は、『九州の算額』の序文で、

九州に現存する算額を深訪して廻った時、九州以外ではまだ算額が発見されているのに、九州では逆に紛失してしまった算額が三面もあることがわかった。

このままでは、九州に現存する算額は全部なくなってしまうのではないかと心配がでてきた。又九州の各県では沢山の歴史の本が出版されているが、算額の紹介は非常に少い事もわかった。現存する算額も月日が経って、図・文字とも判読できなくなっているのが現状である。少しでも活字に残して置きたいと思い『九州の算額』を思い立った次第である。

と述べている。この思いは、九州だけの問題ではなく、日本全国にもいえることであろう。このような事業が研究者個人の力に頼っているのが現状である。

九州には、『続神算法』の中に、肥後国青井社に寛政10年9月人吉の西九郎左衛門孟周があげた算額の記録が目につく、また、「おくんち」で有名な長崎市諏訪神社にも算額が現存する。このような算額をまとめたのが『九州の算額』で、天明8年(1788)から昭和61年までの復元算額の15面について述べている。数学史学会の会員から頂いた算額集を参考にして、ご自分でワープロにより製作したという。『九州の算額』を希望する方は、直接下記に送料(260円)をそえて申し込んでほしい。

〒856 長崎県大村市水主町1-9781-90

米 光 丁

会 報

報 告

紀会梅文鼎国際学術討論会暨 三次全国数学史年会 出席報告

道 脇 義 正

表記の学術会議が安徽省合肥市、宣州市を会場に、1988年11月1日から11月5日まで行われた。終わって世界の名山黄山に登った。そして抗州、上海とまわって、上海から帰国した。その概要を述べる。

10月30日 北京駅発合肥行直行特急寝台、18時発が遅れて18:20発。食堂車で3回食事。中国人を人払いして私共——自然科学史研究所陳美東所長、下平和夫氏、城地茂氏(北京師範大学留学中、通訳を依頼)と筆者だけの食事。優越感よりは淋しい感じ。

10月31日 13時25分合肥着。合肥は人口は約80万。中国一大きいといわれる中国科学技術大学のゲストハウスに入る。外国人教師が多数おったが、設備は悪い。

11月1日 8:00~11:30 開会式

プログラムもないのか、会場に行く途中にその日その日のプログラムを書いてはってあるが、中国語では甚だ困惑した。

李迪教授司会、中国科学技術大学副学長龔昇(Gong Sheng)教授の挨拶。杜石然氏の経過説明。大竹茂雄、山田慶児、Marzloff各氏からの祝電披露。日本人2名がすべての外国人だった。

下平氏、陳所長 楊紀珂人各氏の祝辞、呉文俊氏の梅文鼎の業績紹介、休憩
梅栄照氏が梅文鼎の生涯を、薄樹人氏が業績を話す。

14:00-17:30 杜石然、下平和夫氏座長

1, 道脇義正(上武大) Influence of Li-suan Chuan-shu in Japanese Mathematics and Different Ways of Thinking Between Mei Wen-ting and Japanese Mathematics

2, 梁宗巨(遼寧師範大) The Origin and the Meaning of the Term Algebra.

3, 孫小礼(北京大) 略

4, 張奠宙(華東師範大) 略

5, 蘭麗容(新加坡国立大) 代読 略

6, 鄧宗琦(華中師範大) 略

11月2日 8:00-11:30, 14:00-17:30

分組活動というので、通訳がない。従って午前中は構内見学、午後は自然科学史研究所で全行程通訳として同行して呉れる廖育群氏が公園を案内してくれた。

11月3日 8:00-10:45 梁宗巨, 梅榮照氏座長

- 1, 李迪 (内蒙師範大) 宋代数学家謝察微
- 2, 李文林 (中科院数学研所) 略
- 3, 杜石然 (中科院自然科研) 略

4, 下平和夫 (国士館大) Mathematical Textbooks in the Early Edo Period

5, 白尚恕 (北師範大) A Tracing of Visit and Study in Xuan Chen 代読

12:30 会場移動のため呉夫妻, 下平氏と筆者ら4人は乗用車, 他は観光バスで長江をフェリーで渡る。17:30頃宣州市政府招待所に到着。バスは19時少し前に到着。

11月4日 9:00 - 梅文鼎生誕355年記念式典

- 1, 杜石然氏が私共を紹介, その他主要な人人も紹介。
 - 2, 中共宣州市委書記某氏挨拶, その他4名も, 下平氏祝辞。杜石然は祝電披露。
- 会場から5分位の所にある梅文鼎の生家を記念館に改築中, まだ完成していなかった。

14:00-梁宗巨, 道脇義正, 夏子超氏座長

- 1, 書記某
- 2, 梅分慮 (文鼎の子孫)
- 3, 梅榮照
- 4, 呉文俊
- 5, 城地茂 Mei-WenDing's View of the History of Mathematics in China
- 6, 龔昇 (科技大副学長)
- 7, 胡炳生
- 8, 劉鈍 梅文鼎的詩歌
- 9, 劉浩民 関于梅文鼎<籌算>的新史料
- 10, 呉裕賓 梅文鼎对清曆算学發展的影響
- 11, 夏子超 (市長)

参加120名, 論文数88篇ということであった。

19:20より市長招待の映画, 黄山の話ということだったが, 内容は違った。

11月5日 碧山龍泉洞見学

下車して細い道を, 紅葉を眺め乍ら登り, 寺の休憩所に到着。お茶, 棗をつまむ。

満山の紅葉映える龍泉洞

を杜氏に示したら直ぐに

一路軽車一路風 甜棗秋葉相映紅

天生一个龍泉洞 佳賓吹笑日瞳瞳

とかえして呉れた。これを廖育群氏が大きな紙に書いて龍泉寺に奉納した。

11月6日 4時起き, これは間違いだった。7:10出発。黄山市の黄山賓館につく。一休みして黄山に登る。頂上で2泊。筆者は疲れと乾燥のため風邪, 賓館に残り, 黄山温泉に入る。空前の湯水でホテルではトイレが使えず, 食事もない。伊香保温泉の階段町と同じような所に朝夕食事にいった。

各位賓客

因天旱飲水, 上厠者 請鉢門向左特40米

処有公共厠所, 請涼解 本館啟

11月9日 7:30 黄山出発 15:00 抗州到着。途中バイクと小型トラックの接触で, バイクの運転者が死亡。なかなか通れず, 廖氏の気転で割に速く通してもらった。

抗州駅で16時, 17時の上海行特急列車があるが, 切符がとれず。結局タクシーとなる。約200km, 5時間位で華東師範大学につくかと思った。しかし追突があり, 翌10日の真夜中1時に到着, 寝たのが2時という。午前中華東師範大学訪問。午後中国科学院上海分院訪問。こちらはバイオの研究が中心。魏乃森副院長, 張華海氏らと交流する。

11月12日 上海より帰国した。

別に会議に先がけて遼寧省の沈陽市にある沈陽化工学院を訪問したので, 筆者の旅は3週間にも及んだためか, 風邪は帰国後半月位も治らなかった。

物故会員

会員 宮本昭三氏は平成元年8月10日逝去されました。
ご冥福をお祈り致します。

新入会員

八木 淳 夫 〒511 三重都桑名市矢田806 矢田タウン105号
TEL 0594-22-2575
勤務先 三重県立白子高等学校 (0593-86-0017)

中山 政 三 〒400 山梨県甲府市大手1-1-34
TEL 0552-53-7534

中上 陽 子 〒336 埼玉県浦和市三室1128
TEL 048-8733-2434

後藤 博 紀 〒424 静岡県清水市船原1-239
TEL 0543-47-1592
勤務先 清水市立商業高校 (0543-53-5388)

編集後記

122号が本会創立30周年特集号のため永年本誌の編集を担当されていた高木茂男氏が特別に担当しました。

1号分休ましていただいたため本号から新たな気持ちでのぞみました。

昭和から平成に変わり、本学会も新しい企画のもとで、もっと積極的に会員の皆様のため、あるいは数学史研究者のための資料を提供したり、情報を伝えていこうと思います。そのためには、活発に活動できる会員に協力をお願いしたいと思います。

会員名簿はコンピューターを利用していましたが、121号に同封した名簿から、ワープロに原簿を切り変えました。そのため校正したにもかかわらず、ミスが目立ちます。これからは毎年発行し、ミスのないよう努めます。

また、他に「和算家人名辞典」、「和算書所在目録」などの整理にワープロ、コンピューターであたっています。他にもいくつか事業を計画して実行に移しておりますが、手不足のため協力できる方はよろしくお願い致します。

(佐藤 健一)

平山 諦・松岡元久編 安島直円全集

安島直円（あじま・なおのぶ）は、関孝和、松永良弼、和田寧などと並び称せられる江戸時代の著名な数学者である。本書は、直円の著作全42篇を、原文に忠実に活字化して収録している。

《内容》 不朽算法／平方零約解／球中四不等球術／環円無有奇術／五円括術并無有奇／円内交斜容円術／累円術起源／南山安島先生解術一十二問／弧背術解／角法通術／連籌変数術／不尽一周術／洛書変化法／授時曆便蒙／交食蒙求俗解ほか

なお、編者の平山諦氏は元東北大学教授、松岡元久氏は山形大学教授である。

A 5判・上製函入・表紙布装 10,000円
口絵4頁・本文680頁・英文解説78頁

富士短期大学出版部発行

数 学 史 研 究

通 卷 123号 (1989年10月～12月)
発行所 日本数学会
〒161 東京都新宿区下落合1丁目7番7号
富士短期大学科学史研究室
電話 東京 (03)368-8826 番 (出版部)
会 費 年額 7,000円
振 替 東京2-20022番
印刷所 トーコーワイズ株式会社
〒164 東京都中野区東中野3-14-19
電話 (03)368-8232 番

富 士 論 叢 萩野公剛教授華甲記念号

A 5判, 608頁 (うち, 数学史関係302頁), 実費 (1500円+郵送料)

そろばんによる計算体系……………旦尾 広	磯村吉徳の方陣作成の考え方……………戸谷 清一
文学と日本科学 (講演記録) ……大矢 真一	慶応の算額—算額の史的研究 (1) ……萩野 公剛
明治時代の数学雑誌 (3) ……片野善一郎	初期和算への西洋の影響……………平山 諦
数学史にみる幾何学的代数学	On the Resemblance Problems of
—バビロニア・中国・ギリシア……………黒田 孝郎	"Lilavati", "Chiu-Chang Suan-Shu"
貞享年間に頭書きの加えられた	and Wasan ……………道脇 義正
算書について……………下平和夫	小林 龍彦
清時代の珠算教科書……………鈴木 久男	数学史研究と数学教育活動との関連
How Wasan (Traditional Japanese	の分析—数学の研究・学習と各種
Mathematics) Was Learned by	環境との関連を視点として……………松岡 元久
Local Farmers in the 19th	中国書の和算への影響について……………吉田 柳二
Century ……………千喜良英二	萩野公剛教授略歴および著書・論文目録

その他、一般論文が収載されています。

*お申し込みは、葉書または電話にて、下記宛にお願いいたします。

*残部僅少につき、お早目に願います。

富士短期大学出版部

〒160 新宿区高田馬場3-8-1

電話 03-368-8826

SŪGAKUSHI KENKYŪ

JOURNAL OF HISTORY OF MATHEMATICS, JAPAN

NO.123

October—December, 1989

CONTENTS

ARTICLE

- TOYA Seiichi ; On "Shinhen Shosanki" (1)
MICHIWAKI Yoshimasa and MARUTA Nobuo ; On Masamichi MARUTA (7)

MATERIAL

- HIRAYAMA Akira; The papers of MIKAMI Yoshio (16)

OBITUARY NOTICE

- Editorial Staff of SHNS; Deeply Mourning for Professor Yan Dunjie (19)

- BOOKS (23)

- NEWS (25)

Edited and Published by

The History of Mathematics Society of Japan

Fuji Junior College

1-7-7, Shimoochiai, Shinjuku-ku, Tokyo, 161, Japan
